VITALITE　インタビュー

“超二流”のプロ魂が支えた野球人生

日本テレビ野球解説者／前オリックス監督
土井　正三
聞き手：佐多保彦　㈱東機貿代表取締役社長

どい・しょうぞう
1942年、兵庫県生まれ、立教大学卒業。V9時代の巨人軍で二塁手として活躍。巨人軍コーチ、オリックス・ブルーウェイブ監督などを経て、現在日本テレビ野球解説者。

佐多：今年の巨人は好スタートを切りましたが、土井さんはこれをどうごらんになりましたか。

土井：まさに「落合効果」でしょうね。落合選手は柱になれる選手ですから。チームには皆を引っ張っていくようなドーンとした柱が必要なんですが、それは監督じゃだめなんですね。これまで、原、篠塚、吉村といった選手が何本かの支柱になってきたが、本当の大きな柱にはなりえなかった。落合選手はいま、ただ「打つ」というだけじゃなくて、大黒柱としてチーム全体に安心感を与えています。彼がいて松井選手が大活躍したから、周りに波及して相乗効果を出したんですね。

佐多：落合選手一人がチーム全体を変えた、と。

土井：そうです。たった一人が入って来たためにチーム全体ががパーっと生命力を吹き返すっていうこと、本当にあるんですよ。例えば、僕が巨人に入団したON（王・長嶋）時代の昭和40年、金田正一さんが国鉄から入って来た。この大投手は、キャンプにナベ、カマ、枕までもってくるんです。場所が変わったからといって体調をくずすことのないようにと、万全を期してのことです。そして食生活の管理、個人的なトレーナーまで随伴してくるという徹底ぶり。この筋金入りのプロ根性が、チーム全体を変えるほどのショックを与えたんですね。「ここまでやるのか」と。その影響力はすごかった。下の選手にガタガタ指導するのではなく、上の選手がちょっとやってみせるだけで、ピラミッドスタイルができてしまう。この効果を川上監督は狙ったんです。もちろん彼ほどの選手だったからできたんであって、雑魚ではこうはいきません（笑）。

長嶋さんも、前回巨人が最下位になったとき張本選手を迎えたでしょう。張本選手の活躍で王選手が再生し、チーム全体が刺激を受けて、51、52年に優勝した。このような、かつての「金田効果」「張本効果」を見ていた長嶋監督は、今回、落合選手を入れてチームの活性化をはかろうとしているんですすね。彼が打つにこしたことはないけれど、むしろ活性剤として期待していると思いますよ。

佐多：なるほど。ところで、落合選手のような超一流選手の素質とは、どのようなものなんでしょう。

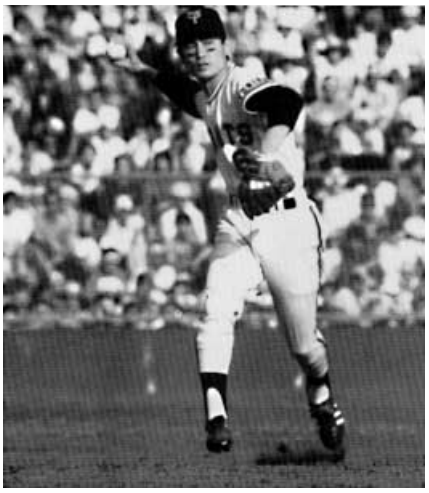
土井：そうですね。集中力があって、チーム全体に気を配りながら、チームをリードする気迫、やる気。それに創意工夫。こうでないと超一流とは言えないですね。あとは「間」のとり方ですね。例えば、ピッチャーがピンチの時、落合選手は絶妙なタイミングで出て行きますよ。試合全体の中での「間」を肌で知っているんですよ。長嶋さんも「間」ははずさなかった。それはもう天性のものがありましたね。

かつて川上監督は名指しで長嶋選手を叱ることがありましたが、それでチーム全体ががピリッとひきしまりました。長嶋さんも、何のわだかまりもなく怒られ役を引き受けていました。それは彼の性格を知り抜いた上での、川上監督一流の選手掌握術でもあったんです。

佐多：V9時代の選手は、チームに王、長嶋という二人の英雄を持つという難しい状況のなかで脇をしっかり固めておられましたね。その成功と強さの秘訣は何だったのでしょう。

土井：まず二人の人間性のよさですね。また、僕達は二人に技術対抗できないと分かっていたから、「自分の仕事に徹する」というかたちで個々の力を発揮したということがあるでしょうね。例えば柴田選手は塁に出て走る。僕は2番に出てつなぐ……各自の役割分担のなかで、プロとして自分の仕事をカッチリすることこそが彼らに対抗する術だった。決して二人に依存することはなかったし、またそれがプロとしてのプライドだったのです。チームが強くあるためには、超一流の選手に呼応した、それくらい確固たるプロ意識がメンバーに必要不可欠だったのです。

佐多：かつて三原監督は、土井さんのようなこれぞプロフ



′73年、土井二塁手

巨人軍内野陣（写真提供：報知PRセンター）

ェッショナルと呼べるような「いぶし銀」の選手達を「超二流」という言葉で表現されていましたが、特定の分野におけるプロ意識をもつということですね。

土井：そう、自分の分担にどれだけ徹し切れるかです。今年、落合と松井がいいなら、一年間どれだけ徹底して彼らにチャンスを作ってやれるかということ。周りの選手が縁の下の力持ちになることに納得するようになれば、巨人も変わってくると思います。あとは選手個人のやる気と、そのやる気が正しく評価されることが必要ですね。例えば僕は、内野の要である二塁を守り、またONの力を最大限引き出す脇役に徹し、チームプレーに力を注いでいたけれど、その姿勢が評価されなければやらないですよ。僕らの時代はチームプレーを認めてもらって、どんどん給料も上がった。タイトルをとらなくとも、それなりの評価をしてくれていることが分かっていた。四年目には一千万プレーヤーになりましたから。

ところがその後、チームプレーより個人の成績で評価し始めた。「個人のアベレージだけを問題にするんなら、チームの勝敗は関係ないんだな」と、選手のやる気がガタガタッと落ちてきたのが、48、49年。ここで川上監督時代から営々と築いてきた現場と会社のいい関係が崩れてきた。経営者はやはり正しい評価をすべきですよ。選手のやる気をどう起こさせるかは、現場の監督、フロントや会社の経営者の評価と手腕にも大いに関係があるわけです。

佐多：選手のやる気、ある種の生命力のようなものは、昔と今とでは違いますか。

土井：それは違います。僕らはコーチに何か言われるのを待ってはいなかった。いいプレーはすきあらば盗んでやろうと思っていたし、独自の方法を編み出そうとしていたものです。今の人は次になにをやればいいか、いちいち聞きにくる。「各自、やりたいことがあるだろう、かってにやらんかい」と言いたい。それに若いのに諦めがはやい。僕なんかは絶対に諦めないという、突き上げるものがあった。だからこそプロとしてやってこれたと思っているんです。強いやつが後から追い上げてくれば、必ず負かしてやるという気持ちが働いた。セカンドの後継としてジョンソン、シピン選手が入って来たときも、松本選手が入って来たときも、冗談じゃない、負けてたまるかと思いました。本能的にね。

ただ、篠塚選手のときは、キャッチボールを見たときから、「やられる」と思った。だから指導しなかった。それは僕がプロとして生き抜くためには必要なことだった。その後、コーチになったときには徹底的に個人教授しましたよ。ま、僕の場合は、やる気も負けん気も性格的なものかな（笑）。

佐多：最後に、今、Jリーグが人気ですね。プロ野球がちょっと押されぎみではないでしょうか。

土井：危機感を抱いていることは確かです。サッカーは野球の持つマイナス面を考慮して運営しています。フランチャイズ制を徹底し、地域と密着したファンを増やし、ジュニアの育成にも成功しています。そんななかで野球がもう一度観客動員力を発揮するためには、ファンに向けて新たな魅力づくりを考えていかないといけません。技術を高め、ゲームをエキサイティングなものにするのはもちろんのこと、プロ野球をビジネスと考えて真剣に取り組むことが大事でしょうね。女性ファンの開拓のために、レストルームをホテルなみにするとか。女性の優待日を設けるとか……。

それに、日本野球のナショナルレベルを向上させるためには、野球界のプロとアマの垣根にこだわらず交流を進め、底辺の拡大をはかること、そのための質の向上を担う優れた指導者を育てていくことが必要じゃないでしょうか。